

美術館通信 No.16

9月4日の講演会では石川九楊氏をお招きし、創造することや自作についてお話をいただきました。その様子を一部ですが紹介いたします。



ここ日本橋は私がこの世に顔を出す前に母親のお腹にいた場所でございます。また、「稻むらの火」の濱口儀兵衛(御陵)さんの孫が浜口陽三さんといふことで、一〇一年の不思議な縁を感じております。

「浜口陽三・石川九楊二人展 光の消息」関連イベント 講演会「点と線、点と画の思想」

講師 石川九楊【書家・京都精華大学教授】

合には、押す力がはたらきます。押す力と引く力はまったく違う世界ですから、逆版を原版とする銅版画で書の世界をつくることは至難です。このように力動に生命をかけていくのが書です。その表現の幅をどう拡げるかに私は一番初めに取り組みました。みんな同じようにじみとかそれで書いている従来の書に対する疑問を感じ、その世界から抜け出すために、動かない筆蝕、動いた跡を見せないで静止しているように見える書を書くことはできないかと思い、試みたのが私の書の出発点でした。

今回展示している作品は一〇〇八年に源氏物語が一千年紀ということで、かつて一度シリーズで書いたものに再度取り組み仕上げたものです。それをどのように見るかはみなさんの自由。自由に見ていただいて、ご感想いただければいいです。後半の『一問一答』のお時間には、参加者からの様々な質問にお答えいただきました。

①今回源氏物語は壮大な作品ですが、制作の過程で飽きたり、迷いが出たりしないのでしょうか。どのようにモチベーションを保ちますか。

●源氏物語書巻とタイトルにしてますが、書でも、どんどん場面が変わっていくドラマチックな表現ができるだろうかと思って書いたものであります。飽きることはなく、いつまでもやっていたいから。ただ、疲れることがあります。この作品で私の寿命は十年くらい縮みました(会場笑)。疲れた時そこを突破するには風呂に入るか寝るかです



●書というのは声を発しますから、是非見ると聞こえる声を聴いてください。自分もその声と対話しながら書いていますから。私が誰かの作品を見ると、書の一点一画の書きぶりの中に声がのっていますから。それから色彩、色の世界は非常に難しいですね。色をどう使うかというのは実際のところ私はよくわからない。東アジアの色彩は西洋の色彩と違つて、それぞれ意味を持つている。墨の黒は、美術の時間に教わるような色ではなくモノクローム、光と影の影色です。モノクロームの世界とは別に、色彩の世界という想定をした時に、東アジアでは一番上に赤があり、これと対称的に青があり、その他の色が下にある。こういう構造です。特に赤は特権的な色で、だから判子は赤で押します。西洋の色彩と

ね。一日に四、五回風呂に入る時もあります。②一つの作品にどのくらい時間がかかりますか。
●一日で出来る時もありますが、大抵は数日かかります。「源氏物語書巻」の場合の一〇〇八年一月からはじまって八月の中旬までかかりました。他の出版などの作業は全て止めて取り組みました。

③音や色彩に対してのご興味はありますか。

●書というのは声を発しますから、是非見ると聞こえる声を聴いてください。自分が誰かの作品を見ると、書の一点一画の書きぶりの中に声がのっていますから。

は違う。私は書にずっと馴染んできましたからなかなか色がうまく扱えない。というか、墨にはあらゆる色が含まれる。光と影のシンボルです。書において、真っ黒の墨や、明らかに顔料や染料を混ぜた青墨や、茶墨など、そういうのは基本的には嫌います。なぜなら、影ではなく色が見えるからです。色を見せるような墨色はよくないです。光と影で見えてくるほうがよいと言えます。

力動の芸術「書」

一方、書とメゾチントの決定的な違いのひとつに力動=ベクトルの重要性の有無があります。書というものは力と方向が決定的な意味を持っていて、いくためにはやはり傷をつけていくしかない。だが一方でその罪に対する贖罪の祈りというものは間接的なのでかく方です。人間がつくることによって光を招き入れる。書は、繊維の目の立った紙を墨の含んだ筆で目潰しすることによつ

て、光の届かぬ陰翳をつくる。我々は普段「絵画」「版画」「音楽」「書」などと分類していますが、人間が作る以上、人間の動き、動作、行動、動詞で定義づけるのが一番はつきりします。人間の行動は大きくて、「かく」と「はなす」に分けられます。「かく」というのは、筆やベルソー、あるいは家庭の主婦の包丁、農夫のでもいいですが、人間が刃物を持つて間接的に世界と対することです。「はなす」というのは動作や声など、自分の身体から直接的に意識を外側に出すことです。打楽器といふのは間接的なのでかく方です。人間がつくることは刀物(=筆、ベルソー、道具)を持って世界に傷をつけ変形させることです。

「かく」というのは対象(世界)に傷をつけ、祈るということから元々できている言葉です。傷をつけるということは人間の原罪です。人間が人間と生きていくためにはやはり傷をつけていくしかない。だが一方でその罪に対する贖罪の祈りといふものは直接的に意識を外側に出すことです。打楽器といふのは直接と間接で同時にものに触れる。それゆえ人間は「目で触れ、手で覗く」ことができるのです。

④判読の手がかりは何ですか。あるいは、判読できなくとも、筆触(筆づかい)、墨の濃淡、線などを鑑賞できればよいのでしょうか。

●墨の濃淡、筆づかい、線、それはいわゆる書道界的な言い方で、まずそこを出ないといけない。一点一画をかいて言葉に変えていく行動をどういう風に追いかけていくかです。「なぞつていく」ということが生命ですね、筆蝕といふのは墨の濃淡や筆画の長短などではなく、かいていく中で何が働くかといつて言葉に変えていく行動をどういう風に追いかけたい。私の作品に書かれているのは線ではなくあくまで文字の字画です。のびている線のようであっても線ではなくて一画です。なぜ「ま」や「き」の一画がここまで馬鹿馬鹿しく会つていただきたい。私の作品に書かれているのは線ではなくあくまで文字の字画です。のびている線のようであっても線ではなくて一画です。

⑤この作品に書かれているのかどうことは、なぞつていけば、その作品の方から口をひらいてくれるでしょう。私自身も、改めてなぞつていけば自分が気づかなかつたことが違うかたちで見えてくるだろうと思います。